

4. 会議録

第1回松江市における図書館のあり方検討委員会 会議録

1 日 時 令和2年1月7日（火） 13時30分～15時40分

2 場 所 松江市役所3階第1常任委員会室

3 出席者 委員15人、事務局9人、傍聴2人、報道5社

4 会議経過

- (1) 開会
- (2) 教育長挨拶
- (3) 委員の委嘱
- (4) 委員及び事務局紹介
- (5) 検討委員会について
- (6) 委員長、副委員長の選出
- (7) 議事
- (8) その他 今後のスケジュールについて
- (9) 閉会

5 議事録

- (1) 松江市における図書館のあり方検討について 資料1 事務局から説明
- (2) 松江市立図書館について 資料2 事務局から説明
- (3) 先進地紹介 資料3 事務局から説明
- (4) 意見交換 論点①現在の松江市立図書館に対する市民の思い（イメージや印象）

A 委員：来館者人数について、年代別がわかれば。

事務局：年代別での統計はない。平日午前中は高齢男性、週末は親子連れの利用が多い。

A 委員：「よるの図書館」の利用者は。

事務局：色々な世代の方に来ていただいている。150人くらいの利用がある。

B 委員：松江市の図書館と県立図書館の役割分担は。

事務局：県立図書館には高価な専門書（の購入）をお願いすることがある。一般的な図書は両館にあるので明確な区別はない。県内各館間の相互貸借もある。

B 委員：市民活動や市民の活用の仕方についての役割分担があれば。

事務局：特にない。橋北橋南で行きやすい方を利用する。県立図書館実施のビジネス支援、独立した児童コーナー、学習室に向けて行かれる方も多いと思われる。

C 委員：県立図書館の（資料の）方が 1,000 円ぐらい高いというデータがある。また、県立図書館の場合は、松江市立図書館とだけ役割分担しているわけではなく、県内の市町村立図書館全体との役割分担をしている。

利用については、図書館の利用の仕方に変化があり、読書だけではなくなってきた。県立図書館はモデル的にやって、その成功例を市町村の図書館に知らせるというようなイメージ。

それ以外に、国からは、地域や個人の方の様々な課題を解決するための支援を積極的にしていこうという基準が出ている。それに伴い、全国の図書館では今まで図書館でされなかったような様々なイベント、講座等が盛んに実施されるようになってきた。それは図書館が企画をしてやっているというよりも、図書館と専門機関が連携をしながらやっていくというような感じ。全国の図書館は、既にその方向で流れてきているので、松江市だけではなく、県内の市町村立図書館でもその基準をよく読み込んで、「自分のところでは、こういうことができるのではないか」ということを考えて、積極的に事業展開をしていただけたらと思う。

D 委員：八束公民館にも図書コーナーがあり、約 2,000 冊の図書と、机を置いて学習をするスペースもある。利用者に聞くと「中央図書館は、小さい子ども連れでは行きにくい」という意見もあった。八束の場合はかなり遠いので、子どもたちも総合文化センターに行って図書館を利用するということは少ないと思う。

現在、公民館の図書コーナーもかなり利用されており、子ども向けの本を中心に置いているが、習いごとに来たついでに借りたり、親子連れで借りに来られたりという利用もある。

私自身も中央図書館を利用することもあるが、やはり駐車場に停められなくて諦めることもあるし、仕事帰りに行くのは難しくて利用ができなかったりする。八束には移動図書館が回ってくるので利用していて、新しい本がたくさん積んであり楽しみにしている。

E 委員：乳幼児の保護者という視点でお話をさせていただく。30 年度に第 1 子を産み、「えんむすびぶっく」とか、よちよちの会、読み聞かせの会にお世話になった。出産までは仕事ばかりで、なかなか平日図書館を利用できなかったが、漠然と絵本を読ませて子育てがしたいと思っていたので、4 か月児健診のときにお話の読み聞かせをしてもらってからお邪魔するようになった。たくさん絵本に触れて、自分で買い与えるのとはまた別で、「みんなで共有して大事に使うものだよ」ということを教えながら育てたいと思っていたので、図書館のイベントにたくさん参加させてもらった。その中で思ったことが何点かある。

小さい子どもを連れてはお手洗いに行けない状況。個室の中に子どもを座らせておけるスペースがない。ベビーベッドや、おむつ替え用のところは 1 つだけあるが、寝返りをするようになると動き回るので、座らせておけないがためにママたちはお

手洗いに行けない状態。改修や移転・移設などを考えていただいているのであれば、そのようなところを検討していただくとより連れて行きやすいと思う。

よちよちの会、わらべ歌の会、1 ヶ月に 1 回先生が歌を聞かせてくれるようなイベントもあり、もっともっと子育て世代の方がたくさん参画され、まちづくりの中心に図書館があるような松江市になってもらえると。とても楽しみにしている。

F 委員：従来の図書館の使われ方ではなくて、地域でどれだけ役に立つものになるのか、市民が使いやすいものになるのか、そういう論点で今後は考えていかなければいけないと思う。

利便性とか利用しやすい施設、そういう形もそうだが、形が整ったから利用者数が上がるということでもない。もっと市民が使えるような場にするためには何が必要かということを考えていかないといけない。今は生活様式なども変わり、働き方も変わってきた。利用者も、昼間の利用よりも夜の時間帯のほうが使いやすいとか、ライフスタイルに合わせた利用のしやすさというのも考えていかないといけない。

除籍もしながら蔵書を整えていくには、それを判断する司書の力が重要だと思う。地域文化、発信力、市民からの質問に答えられるような教養を身に付けながら、懇切丁寧に一つひとつ話をしていけるための人材育成も非常に重要だと改めて思った。

G 委員：図書館は市民に寄り添う、そばにあるべきもので、何か知りたいと思ったときにすぐ行ける場所であってほしい。これからの図書館というのは、誰に対しても生涯学習に寄り添うようなものが良いのではないかと考える。

誰にとっても使いやすい図書館を目指すにあたり、施設に関して言えば、学習スペースだが、ラーニングコモンズのようにミーティングや複数の友人たちと一緒に会話をしながら勉強することができるスペースに加えて、従来の図書館にあるような静かに勉強ができるスペースの両方があると良いと思う。

また、お手洗いの件など、バリアフリーの観点からも、誰もが使いやすい施設を目指すと思う。

H 委員：橋南、橋北という言葉が定説になっている松江市においては、市立図書館は県立図書館との棲み分けで南にあるべきではないかと思う。

それと並行して、機能が時代を追って変化しているのを鑑みるに、本は豊かになってきていて、欲しいものは自分で買ってしまう。交換するような手段もたくさんある。中古書店で安価に本が入手でき、しかも、ベストセラーは必ずある状態。そうすると、ものを調べに行く、そこで一緒にグループで「調べながら話したい」といったときに、知識を得ながら打ち合わせなどができるような施設になっていたら良いというのが 1 点。

もう 1 つは、司書のスペシャリストとしての知識と経験と見識に期待をしたい。島根県立図書館には「この人に聞けば、県内のざっとした郷土資料の情報が全部分かる」みたいな方がいてすごく安心感がある。そういう場所を市立図書館が目指す

と松江市の財産になるのではないか。

あと、公文書館もよろしくお願ひしたい。

I 委員：図書館というスペースは、在宅で子育て中のお母さんが安心して出かけられるとても良いスペースだと思う。現在、働きながら子育てをされる方への支援は、国を挙げてたくさん進められているが、できれば同時に、在宅で子育てをされているお母さんのための支援も進めていただいて、一辺倒にならないための配慮が必要ではないかと思う。

子どもたちのためのスペース、一般のためのスペースが一緒ということで、お母さんたちが遠慮されている様子も見られて心苦しいというお話もあった。今後の図書館では、ぜひ心置きなく子どもたちが遊べて、お母さんたちも安心して使える場所を。また、それが実現できるまでは、スペースの都合で難しいところは人の力で。トイレなどは少し見ておいてもらえる方がおられると、お母さんたちもそこに居場所がなくても安心。声を掛けてくれる人がいるだけで助かるところがある。ハードだけではなくソフトの面で、少し声が掛けやすい方がいてくださるといい。

また、息子が開館の30分前に行って並んでいたが、「少し前で整理券が終わってしまった」と言って帰ってきたことがあった。なるべく空いているスペースを開放していただいているとは思いますが、現状では足りない。ぜひ今後の図書館では広い学習スペース、静かに勉強できるスペース、先ほどお話をあつたラーニングコモンズ、少しお話ししながら勉強ができたり、息抜きができたり、そういう色々なスペースが多面的にあるととても良いなと思う。

島根大学では、時間を区切って、学生に学習のためのスペースを開放されているという新聞記事を見た。県立大学も以前はそういうスペース開放をしていたことがあるようだが現在はないとのことなので、問題等があるとは思いますが、困っている中高生のためには居場所が必要。学生時代にどれだけ自分の居場所があつたか、どんな価値観、知識や環境、大人に出会つたかということも、帰って来たくなる地元には必要。どこへ行っても時間を気にしたり、お金を気にしたり、居場所がないと中高生が感じなくて済むように、色々な面で支援をしていただけると嬉しい。

委員長：県立大学も図書館が新しくなつたので、何か連携ができたらと思っている。

B 委員：息子が中学生のころ、STICビルで勉強しようと館内を探していたら、警備員さんに注意をされて、結局帰って来たということがあった。先ほどの発言のように、図書館だけでなく、松江市全体の公共施設を子どもたちに自由に解放していただけると、より居場所が増えると思った。

自分も中学校・高校のころには、県立図書館に自習室が多くあつたので、そちらに行っていた覚えがある。就職してから、郷土資料を調べるには市立図書館を利用しながらも、やはり蔵書数の関係で県立図書館に行っていた。

松江市に特化した郷土資料や、松江市の中の地域それぞれの資料が集まっていた

ら良いと思う。

子どもの利用については、保育所への配本が一番だった。男の子2人を静かな図書館に連れて行くのが忍びなく、なかなか連れて行けなかったので、図書館からの配本を保育所で貸し出しをしてもらって家で読んでいた。

駐車場については、市立図書館への返却の際、「返すだけで良いのにな」というときに、駐車場と図書館に少し距離があるように感じていた。バリアフリー、ユニバーサルデザインのことも考えると、駐車場からすぐに図書館に行けると助かる。

もう1つ、図書館というところは、小さいころは保護者と行くものだが、小学校くらいからはできるだけ身近に、自分で行けるような図書館なり、図書に触れられる施設がたくさんあるほうがより良いと思った。

最後に、おはなしレストランライブラリーというのが県立大学にあるが、そこは親子がくつろいで、長居をして、また行きたいと思わせるようなスペース。その魅力の1つは、雰囲気と、司書が子どもや保護者に寄り添った声掛けをしている。保護者に声を掛けてもらえると、より子どものころから図書に親しみやすくなると思う。

A 委員：30年前から今の時代、色々なことが変わってきて、時代にあった基本的な図書館というのが絶対必要になってきているだろうと思う。

特に感じるのは、子育て世代にとって行きやすい図書館で、子育ての応援ができるものであってほしい。子どもが多少ぐずっても、肩身の狭い思いをしないで済むような、そういう開放的な図書館であってほしい。

もちろん高齢者にとっても「どこか行かない。図書館に行ってみようか」と言えるような、そういうところがほしい。

あと、子どもの勉強の場ということも。受験や国家試験など、家では勉強ができない。ゲーム、スマホ、ネット等、色々な誘惑がある。少しの時間でも良いからそこから離れて、何も無いところに行って、しっかり集中して勉強できるという場。それはネットから離れる時間を与えてあげられることにもなる。子どもたちもそれはよく分かっている。離れたいけど離れられないから、図書館に行けば無理にでも勉強しなければいけないという、そういう場をつくってほしい。調べものをするにも、今はすぐネットで調べてしまい、そのまま書いてレポート提出というようになってきているが、辞書をひいたり、本を見て調べるということは、脳のためにすごく良いことで、松江市の学力アップにもつながると思うので、そういうことも考えてやっていってほしいと思う。

とにかく憩いの場、癒しの場、コミュニティの場であってほしいと思っている。

最後に1つ質問だが、以前、赤ちゃんが誕生したときに、絵本をプレゼントというのを松江市がやっていた。すばらしいことだと思っていたが、今はやっていないということを知り悲しくなった。また復活できるのか、予算的に無理なのか、今

どうなっているのかを教えてください。

J 委員：私は橋北住まいなので橋南のこの位置に来るためには基本的に車で来る必要がある。やはり駐車場が停めにくいというのが、ここへの足が少し重くなる要因の1つ。それでも松江市立図書館に来たいというときがあるが、それは、松江市立図書館の1つの特徴として、まさに松江市ならではのものを蔵書しているところ。特にカウンターの右側のほうへ行くと、例えば松江市出身の仏教学者の中村元先生の著作集が並んでいる。それから奥のほうに行くと、小泉八雲の原書も含め、松江市出身の文学者の作品。蔵書そのものは県立図書館にもあると思うが、イメージの中では、「こういうものを読もう」と思ったら松江市立図書館に行こうかなというものがある。そういうときには駐車場が空いていることを祈りながら橋北から向かっている。

それから、蔵書整備以外の色々な活動がある。例えば八雲会の講演や、松江文学学校なども総合文化センターでやっていたかと思うが、本を読むだけでなく、総合文化センター全体を通して、何か文化的な香りのイベントを味わおうと思うと、やはりここに来ようというイメージがある。これが今の図書館、総合文化センターの魅力だろうと思う。

それから、市民活動は主に STIC ビルで、総合文化センターでは少し違う切り口で文化的なものを集約してやっている。そういう意味で、一義的に「文化ならここだ」というイメージができていることは非常に良いことだと思う。

ただ、それは裏を返すと、文化に興味のある人にとっては良いことだが、そうでない人はあまり足を向けなくなってしまうという、二律背反のところもあるので、将来的にその辺りをどのようにするかということは考えなければいけないと思うが、今の図書館のイメージの強みとしてはそういうところかなと思っている。

K 委員：私からは学校の現状をお話したい。これからの時代、答えのない課題をどのように解決していくかというアクティブラーニングなど、探究的な学習が求められている。そういった力のある子どもたちを育てるためにも、図書館の資料等を使っての勉強、学び方を学ぶ学習をしなければいけないのが現状。

そういう意味では、図書館を使った学習というのは非常に効果的だと思っている。ただ、学校の資料だけでは不十分な面があるので、市立図書館にある図書館支援センターの職員と、それを媒体にした貸出しの交流をしている。これは物流システムといい、非常に効果的なもの。これをやっている市町は全国的にもそうそうないと思う。全国にも自慢できるサービスを展開しているのではないか。それができる松江市の図書館のあり方というのは、非常に優れていると思う。予算のこともあってなかなか難しいが、このシステムを生かしながら子どもたちの力をつけていきたい。

学校にはそれぞれ図書館があり、学校長は図書館長でもある。それぞれの学校の図書館をどのように有効に使うかという課題もある。学校の図書館を利用した子ども

もたちがいずれ大人になって、松江市にある図書館を自分の力でどう使っていくのか。行きやすい図書館、公共図書館のあり方というのも私たちが教えていかなければいけないと思っている。

今ある総合文化センターは、学校からすると、合唱コンクールで使わせてもらったり、イベントで使わせてもらったり。しかし、図書館を使っているかというとなかなか使っていないだろうなと思う。学習スペースがなかったり、学習に使える本がどれほどあるのかというのを子どもたちも知らない状況なので、それは学校のほうでやろうということになるのかなと思う。

物流的な課題や物資的な課題がたくさんあると思うが、こと、サービスについては、非常に優れたサービスを行っておられると思う。

L 委員：図書館で本を選ぶ過程がすごく大事だと思う。知りたい情報はネットですぐ出てくる、ベストセラーは簡単に手に入るが、そこに行き着くまでに「なぜその本を選ぶのか」、「その周りにどのような本があるか」という、自分の力で選び取るというところは図書館にしかできないことだと思う。本屋さんも好きだが、堂々とチラ見できるということが図書館の良さだと思う。

「あれは図書館にしかできないことだよ」ということを市民に向けて提案し、もっと自信を持って、図書館にしかできないことを発信していく必要があるのではないかと思う。

色々と付加価値を付けていくことも大事だが、まず、図書館がどうありたいかというところをきちんと持っていきたいと思う。

M 委員：やはり駐車場が不便だと思う。それから、少し閉鎖的な、入りにくい雰囲気もあるのかなというイメージ。

築 30 年以上経過し、求められる機能も変化している。全国各地の図書館視察の報告もあったが、1 人当たりの面積や 1 人当たりの蔵書の数というのは、あまり意味がないのかなと。やはり市民にとって身近な図書館や価値がある図書館というところを目指していくべきではないかなと思う。

文部科学省のホームページに図書館の振興というところがあり、公立図書館の求められる役割が色々と書いてある。全国各地の図書館が見直しをしなければいけないということで、様々な取り組みをしている。図書館実践実例集というものがあり、この中にも色々な取り組み事例が紹介してあったので、みなさんも時間があつたら見ていただければと思う。私自身が今後図書館に求められる要素は何かと思ったときには、やはり子どもに対して質の高い教育環境を整えるということが我々大人の役割ではないかと考えている。

昨年の 6 月に東京での勉強会に参加した中で一番印象に残ったのが、慶応大学の中室先生が「これからの世の中は、非認知能力というのが大切になっていきます」という話をしておられた。頭の良し悪しではなくて、社会的情緒というように言わ

れているらしいが「自制心、共感力、創造性、やり抜く力、共同力、コミュニケーション能力、そういった社会性みたいなところを今後磨いていくことが非常に重要」というような話をしておられた。

特に印象的だったのが、「子どもが小さいときに、質の高い教育環境を整えることは、実は経済的な効果も得られる」という話をしておられ、米国のペリー幼稚園というところで、子どもの追跡調査を40年くらいした結果、4歳のときに国が投資した100円が、65歳のときには6,000円から3万円になって社会に還元されることが分かったらしい。ということは、小さい子どもに対して質の高い教育を施すことが地域にとっても有益だというようなお話だった。

今後、方向性を探る中で、既存の図書館の利用者の方ときちんと棲み分けをしながら、小さい子どもたちや保護者が使いやすい図書館になっていければ良いのではないかと考える。

N委員：私は全く見えず、普通の活字の本を読むことが難しいことから、一般の図書館とは縁遠くなっていた。ただ、先ほどの先進地の話を聞き、直接蔵書で読むものがなかったとしても、どういう本を使ったら調べられるのか、あるいは見える方のサポートがあって読んでいただけたら良いので、少し声を出して話し合えるような場所が図書館の中にあれば、気兼ねなく入れるのかなと感じた。

また、バリアフリーの観点から、現在の図書館を歩いてみたところ、バリアフリーのお手洗いが少ないように思う。高齢者や車いすの方、子ども連れの保護者も利用しやすいようなお手洗いを増やしていただきたい。

それから、私たちは車を運転できないので、公共交通機関でアクセスできることが重要。もっと公共交通機関でも、あるいは歩いてでも行きやすい場所を希望する。